

舞響詩「田園」レポート

～踊る、鳴らす、詩う～

主催：東京都／東京文化会館（公益財団法人東京都歴史文化財団）
企画制作：東京文化会館 事業係

【出演・講師】

企画・構成・演出・ピアノ：桜井しおり* 野口綾子*
デフダンサー [ダンスチーム講師]：MAHO YUTO
ろう詩人 [てことばチーム講師]：Sasa-Marie
ろう俳優 [てことばチーム講師]：Yumiko Mary KAWAI（講師のみ）
パーカッションニスト [打楽器チーム講師]：齋藤綾乃*
パーカッションニスト／CODA [打楽器チーム講師]：藤井 健
サクソフォニスト：宮橋菜穂*（出演のみ）
ワークショップ参加者のみなさん（てことばチーム・ダンスチーム・打楽器チーム）

* = 東京文化会館ワークショップ・リーダー

【スタッフ】

衣裳：増田恵美（モマ・ワークショップ）
照明：望月太介（ASG）
舞台監督：穂積千寿（ザ・スタッフ）
演出助手：牛頭奈織美
衣裳製作：寺田和恵（モマ・ワークショップ）
舞台監督助手：佐藤ともを
手話通訳：石川ありす 岡島珠実 加藤裕子 瀬戸 勇 瀬戸口裕子 平原礼奈

企画制作：東京文化会館 事業係
音楽監督：野平一郎
副館長：戸谷嘉孝
事業企画課長：梶 奈生子
社会共生担当：月橋朋子
制作：榮 咲季 阪本涼音 福田綾子
広報：島 彩乃 岡 伊陽子
舞台管理：清水龍之介

舞響詩「田園」レポート
2026年3月発行

構成・編集：平原礼奈
デザイン：堀川達也
写真：鈴木穰蔵、飯田耕治

WEB：東京文化会館 <https://www.t-bunka.jp>



SNS：X @tbunka_official
Instagram @tokyobunkakaikan

発行：東京文化会館（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒110-8716 東京都台東区上野公園 5-45
電話：03-3828-2111

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。
©Tokyo Bunka Kaikan



舞響詩「田園」レポート

～踊る、鳴らす、詩う～

当事者参画による舞台創作の
ワークショップから公演までの記録



東京文化会館
Tokyo Bunka Kaikan

ごあいさつ

東京都と東京文化会館は、2025年11月に開催された「東京 2025 デフリンピック」にあわせて、舞台作品の創作プロジェクトを実施しました。

東京文化会館ワークショップ・リーダーのほか、ろう者やCODA*のアーティストを講師に迎え、一般公募で集まった小学生から高校生までのきこえない・きこえにくい・CODA・SODA*の子どもたちと協働しながら、舞台作品「舞響詩『田園』～踊る、鳴らす、詩う～」を生み出す取り組みです。

今回の企画は、単なる「参加」にとどまらず、アーティストと子どもたちが共に作品の「創作」に深く関わる長期プロジェクトとして実施されました。ベートーヴェン作曲の交響曲第6番「田園」の軸となる「自然」を共通テーマとし、楽曲の要素からヒントを得ながら、てことば*・打楽器・ダンスの3つのチームに分かれて創作を重ねました。その成果として、「田園」「自然」を多角的な視点でとらえたオリジナルの舞台作品を、11月23日（日・祝）に発表しました。

プロジェクト推進の中心的な役割を担ったワークショップ・リーダーとは、演奏する・聴くといった枠を越え、「音楽への参加」という新たな切り口で、芸術・音楽を幅広い層に伝える人材です。東京文化会館では、彼らとともに、年齢や特性、社会的背景に関わらず、あらゆる人々が鑑賞や創造体験に参加できる機会を提供する音楽ワークショップ事業を展開してきました。

今回の創作においては、講師たちの試行錯誤や子どもたちとの交流、さらには手話通訳におけるさまざまな工夫など、プロジェクトのあらゆる場面で多くのストーリーが生まれました。本レポートではその過程を振り返り、取り組みの全体像と舞台づくりの裏側をお届けします。

最後になりましたが、本事業の実現にご尽力くださったすべての関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

東京文化会館

主催：東京都／東京文化会館（公益財団法人東京都歴史文化財団）

企画制作：東京文化会館 事業係

*CODA：きこえない・きこえにくい親を持つきこえる子

*SODA：きこえない・きこえにくい兄弟姉妹を持つきこえる人

*てことば：手話をベースに視覚的芸術に昇華させた表現

目次

舞響詩『田園』企画から共創へ	2
創作の歩み	3
詩う てことばチーム	5
踊る ダンスチーム	7
鳴らす 打楽器チーム	9
舞響詩『田園』公演	11
参加者の声・観客の声	15
舞響詩『田園』の手話通訳	17
制作記	18

舞響詩『田園』～踊る、鳴らす、詩う～

2025.11.23（日・祝） 12:30 / 15:00

デフリンピックスクエア

（国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 小ホール）

舞響詩『田園』——企画から共創へ

自然をこよなく愛したベートーヴェン。

彼がつくった交響曲第6番「田園」を、みんなでじっくり見て、感じて、表現したら——

心は舞い、感性が響き、喜びを詩う、

1日限りの新しい舞台「おんがく」作品が誕生しました。

まざりあって「おんがく」をつくる

ろう者のアーティストやきこえない・きこえにくい子どもたちと舞台作品を作る企画が東京文化会館から立ち上がり、私たちの挑戦が始まりました。以前、東京文化会館が連携するポルトガルのカーザ・ダ・ムジカを訪れた際、ろう者、音楽家、ダンサーが、対等な創作主体として、共同で作品をつくる現場に立ち会いました。そこで聞いた「異なるコミュニティが影響し合うことで創作の次元が更新される」という言葉は、今回の企画にも影響を与えています。

本プロジェクトでは、きこえない・きこえにくい当事者が主体であるという考え方を常に意識し、どうすれば、あらゆる人が共に楽しめる“音楽を伴った”舞台作品や表現をつくれるかを模索し続けました。

全体の構成は私たちが担いながらも、各楽章のパフォーマンス内容（細かな場面展開や、振り付けなど）の創作は講師や子どもたちに委ねました。彼らが「田園」を自らの言葉や身体で捉え、音に依る「音楽」に限定しない芸術表現としての「おんがく」の輪郭が現れてきたように思います。

創作の初期段階から多様な当事者が関わることで、作品の意味や表現方法が変容していく過程を経て、アクセシビリティの拡張にとどまらず、“創作する行為”そのものを問い直す営みでした。

自然から受け取る感覚

自然を愛したベートーヴェンは、美しい森に囲まれた田舎の村に滞在し、そこで深いインスピレーションを受けて、交響曲第6番「田園」を作曲しました。候補曲として検討する中で改めて全楽章を聴き直すと、この曲は自然の描写にとどまらず、自然から受け取った感情そのものを音に投影しているのだと気づきました。約250年前の作曲家の感覚と、令和のいま私たちが自然に対して抱く思いが重なっている。その普遍性に強く惹かれました。今回の題材に「田園」を選んだのは、自然の情景やその中で感じる感情は、子どもも大人もイメージを持てるもので、様々な表現の可能性があると考えたからです。ベートーヴェンが描いた自然の美しさや厳しさ、自然に感謝する心を、きこえない・きこえにくい方々との協働で編み直し、新しい表現として届けたいと思いました。

3つのチームで奏でる

てことば・打楽器・ダンスの3つのチームを作ることで、子どもたちがそれぞれの興味や感覚に合うかたちで参加できるようにしました。5つの楽章からなる「田園」を表現するにあたり、第1楽章から第4楽章までは楽章ごとに異なるチームが担当しました。そして各楽章がつながり、ひとつの物語となって、第5楽章では全員で舞台上に立ちました。

● てことばチーム：手話をベースとした表現で、詩的に作品の世界を物語る

● ダンスチーム：身体そのものがリズムになって、作品や演奏とつながる

● 打楽器チーム：打楽器の振動を身体で感じながら、躍動感あふれるリズム空間を生み出す

公演を終えて、これから

構想から3年、講師との準備に1年、子どもたちとの4ヶ月。私たちなりの感性で生み出した舞台作品が、舞響詩『田園』でした。

わずか1日、2回の公演を終えて、いま感じるのは、舞台そのものよりも、そこに至るまでに重ねてきた時間や出来事の重みです。舞台上で立ち上がったのは、音や動きだけでなく、そこに至る迷いや発見、そして信頼の積み重ねでした。人間同士の紡ぎ合いが一体となり、あの日の舞台が成立していたのだと思います。

舞響詩『田園』は次なる創作へ向かうレガシーであり、新たな出発点として私たちの中に息づいています。

企画・構成・演出

東京文化会館ワークショップ・リーダー

桜井しおり

野口綾子



創作の歩み

舞響詩『田園』のはじまりから公演までの道のりをまとめました。

1 はじまり 発案・企画

2022年～

2022年から企画の桜井さんと野口さんがあためてきた「田園」の構想のもとに、デフリンピック開催に合わせ、デフリンピックスクエアで行う舞台作品として2024年から当事者参画型の企画が動き出す。

2 つながる キャスティング

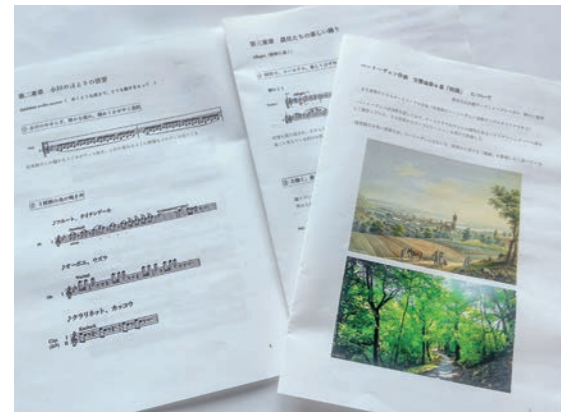
2024年10月～2025年1月

各チームの講師となるアーティストが決まり、1月に顔合わせを行う。

3 つくる 企画会議・プランナー会議

2025年3月～4月

桜井さんと野口さんが考えた構成に、講師たちのアイデアを重ねる企画会議を数回実施。全員で公演タイトルを練り、「舞響詩『田園』」に決定。企画実現に向け、衣裳家、照明家、舞台監督とのプランナー会議も並行して行う。



「田園について伝える時には、音情報だけでなく、私たちが聴き手として感じた印象を解説書のようにまとめました。視覚的・身体的な表現に置き換え共通のイメージを立ち上げることを意識しました。(桜井・野口)」



「打ち合わせをする時は、全員が顔を見渡せる形をつくりました。丁寧に意見をすり合わせ、会議ごとにたくさんの力と想いを注ぐことのできる環境づくりを心がけました。(制作)」

4 編む クリエイション

2025年5月～7月

講師が各チームのパフォーマンス内容を創作したり、子どもたちと協働での創作・稽古の進め方の計画を立てたりする。企画・制作の各担当者と内容を整理し、ときに演奏メンバーによる実演で曲の雰囲気やリズムを確かめながら進める。

5 ひろがる 出演メンバー決定

2025年5月～7月

ワークショップに参加し舞台に出演する参加者の募集を開始。きこえない・きこえにくい・CODA・SODAの子どもたち18名が集まる。

6 磨く ワークショップ P5-10へ

2025年8月～10月

てことば・ダンス・打楽器の各チームで、それぞれ7～9回のワークショップを実施。



7 まざりあう 合同稽古・ゲネプロ

2025年9月～11月

チームごとに練習してきた内容を、ひとつの舞台作品へつなぐための合同稽古を実施。全員が登場する第5楽章や、場面のつながり、コラボレーション部分を繰り返し練習し、パフォーマンスのクオリティを高める。

合同稽古・ゲネプロ

ダンス・てことば合同稽古：9月7日
3チーム合同稽古：10月13日、11月2日、11月3日
通し稽古：11月16日
ゲネプロ：11月22日



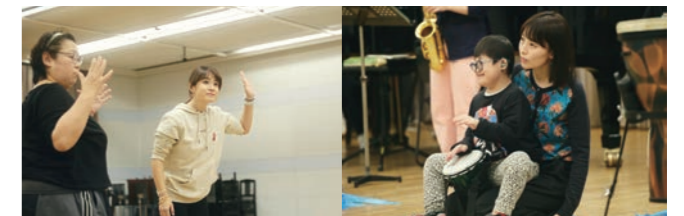
「合同稽古でチームを超えて練習したことで、参加者同士の距離がぐっと近づきました。(制作)」



「子どもたち全体に向けてきこえる大人が話す際には、講師のメアリさんがろう通訳をしました。(制作)」



「舞台上で使う楽器にふれ、響きを感じてもらいながら、楽器への理解も深めました。(桜井・野口)」



「想定通りに進まない時もありましたが、まとめようとしすぎず、場の声や反応を受け止めて整理する進め方に発想を転換できたことが、大きな学びになりました。(桜井・野口)」



「他のチームの様子に刺激を受けたり、もっと練習が必要だと気づいたり、通訳の存在を知る機会になったり、子どもたちにはたくさんの学びがあったと思います。(講師)」



「中高生が低学年の子をフォローしてくれました。次第にその輪が広がり、お互いに支え合う関係性になっていったのが印象的でした。(講師)」

8 舞響詩 公演 P11-14へ

2025年11月23日 ①12:30開演 ②15:00開演

誰ひとり欠けることなく、この日限りのオリジナル舞台作品、舞響詩『田園』を発表!





公演のみどころ

第1、第2楽章は美しい自然の情景です。田舎へ向かう場面から舞台がはじまり、さわやかな風や草花、小川のせせらぎや鳥たちが現れる世界を「てことば」で表現しました。

Creation

中高生のメンバーが多かったてことばチームでは、子どもたち自身がアイデアを出し、表現をつくっていくやり方でワークショップが進められました。講師のマリーさんは子どもたちと一緒に舞台に立つ側で支え、メアリさんは全体を客観的に見て整える役割を担当。講師が手を出さず、一人ひとりが感情と向き合い、そこから湧き出るものを引き出します。「大丈夫、ダメなことはないからやってみて」と、間違いや失敗、やっばいいけないと言われることはないことを共有しながら、自信を持って「ありのままに」表現できる場をつくっていきました。



Workshop

ワークショップの流れ

1回目

- てことば、サイン・ポエトリー*の講義
- 田園のイメージを説明

*サイン・ポエトリー: ろう者の体内に湧き起こる詩を、手話を用いて表現するもの

2-3回目

- 田園のイメージを絵の具を使って大きな「絵」として紙に描く

4-7回目

- 湧き出た風や草花、小川、鳥などのイメージを身体で表現する



講師からの Message



Sasa-Marie (マリー)
ろう詩人

子どもたちは本当によく頑張りと、素晴らしい舞台を見せてくれました。一方で私自身は、もっとできることがあったのではないかと感じています。稽古の時間がもう少しあれば、さらに議論して磨けたら。ワークショップとは何かを考え続けた一年でした。子どもの気持ちや状況を想像し、引き出し、膨らませる方法を探る中で、「なるほど!」という発見が多くありました。ろうの子どもたち・難聴の子どもたちが音楽と出会い、つながれる機会はまだ全国的に少なく限られています。この企画のような取り組みが、これからも継続していくことを願います。



Yumiko Mary KAWAI (メアリ)
ろう俳優

2回目の公演前に「最後だから、もっと自由にやっていたいよ」と声をかけたところ、本番で驚くほど強い表現を見せてくれた子がいて、思わず涙ぐみました。みんなも一人一人頑張ってくれました。観客席から舞台上に上がりたくなったお子さんの姿もあり、会場が一体になったのを感じました。これこそ私が見たかった光景です。子どもの可能性は本当に大きく、みんな力を持っています。表現しようとする心が何より大切なのだと感じます。今回の舞台を通して、いつかまたろうの子どもたちが自由に創作し、楽しみながら表現する喜びをひらきたいという思いを一層深めました。それぞれの力を引き出せる場を作ることが、私たちろうの大人の大切な役割なのだと感じています。

てことばチーム手話通訳メモ

- ろう者の講師とろうの子どもたち、CODA・SODAの子どもたちは直接手話でコミュニケーションがとれたため、講師・子どもたちと制作・舞台スタッフ(聴者)との会話場面、手話で進行している場面の制作・舞台スタッフへの読取通訳を担った。
- CODAやSODAのきこえるメンバーへの配慮として、音声干渉しないよう音量を抑えたウィスパーリング通訳や、距離・立ち位置の調整を行うなど、子どもたちが主体的に参加できる言語環境づくりに取り組んだ。
- ワークショップ過程の途中から、スタッフ(聴者)からの話は、まずろう者の講師に伝え、講師からろうの子どもたちへ手話で伝える「ろう通訳」の方法に変更した。



「てことば」は、手話をベースにした視覚的芸術表現のことで、講師のマリーさんとメアリさんのユニット「mina_te_mari (ミナテマリ)」が提案する手法です。演奏とのコラボレーションがあった今回は、サイン・ポエトリーの要素も取り入れながら、より表現の可能性を広げる手段として採用されました。



稽古場には絵の具やクレヨンが用意され、子どもたちは頭の中や胸の内にあるイメージを描き可視化していきます。シンプルな絵の前に、講師が「これは何?」と問いかけると、手話で豊かに説明してくれる場面も。一人ひとりが持つものを大切に引き出しました。



メンバーにはCODA・SODAのきこえる子もいます。手話でのやりとりはスムーズでも、サイン・ポエトリーには最初戸惑いがあったそうです。稽古を重ねるうちに、詩的な表現が湧き出てくるようになりました。SODAの子が突然、ろうの表現者がする基本形のようなサインを見せて、講師は「人は誰もが詩的な表現を持っている」と実感したと言います。



目と目で見つめあうこと、視覚的に伝わるように表現することを大切に、関係性を築いていったてことばチーム。はじめはアイコンタクトを恥ずかしがる子もいましたが、稽古を重ねる中で、変化が現れました。保護者から「日常生活の中でも親子のアイコンタクトが増えた」と声上がるほど。本番では子ども同士でもアイコンタクトや合図を送り合い、みずみずしく自然や感情を表現していきました。

てことばチームのみなさん



DATA

講師 Sasa-Marie Yumiko Mary KAWAI
メンバー 小学5年生から高校2年生までの5人
てことば手話通訳 瀬戸口裕子 石川ありす

てことばチーム単体ワークショップ

期間: 2025年8月~10月 / 回数: 7回
会場: FSXホール (くにたち市民芸術小ホール) ほか



公演のみどころ

第3楽章では、村人の軽快な踊りをダンスチームが表現し、会場を盛り上げます。演奏に合わせて踊るだけでなく、動きに演奏が呼応したり、無音のサイレントダンスも披露。呼吸を合わせながら、多様な「舞」を繰り広げました。

Creation

ダンスチームは音楽に合わせて踊る場面が多いため、ろう者の講師であるMAHOさんとYUTOさんが「田園」の曲調を掘むところからクリエイションが始まりました。各パートのリズムやテンポ、楽器の音色や描きたい世界観について、桜井さん、野口さんと丁寧にすり合わせ、イメージを膨らませていきます。そこから振付の大枠を作り、ワークショップで子どもたちの身体を通していくと、メンバーが持つ表情や動きの個性が見えてきました。それらを振付に反映させていくことで、明るく元気でテンポ感のあるダンス作品が積み上がっていきました。



Workshop

ワークショップの流れ

1回目

- ・お互いを知るための自己紹介
- ・「田園」のイメージを説明

2-3回目

- ・ダンスの基礎練習
- ・振り付け

4-9回目

- ・難しいフォーメーションを覚えていく
- ・カウントを見ながら曲に合わせて踊る

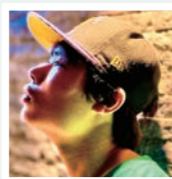


講師からの Message



MAHO
デフダンサー

クラシックの曲から振付をつくり、子どもたちに教え、一緒に踊ることは初めての挑戦でした。最初は焦りやこれまでのやり方へのこだわりがありました。途中から「このメンバーだからできることを大切にすれば、それがお客様も踊り手も楽しめる舞台につながる」と視点が変わり、子どもたちやチームをよく見るようになりました。そうして舞台でひとつになれた瞬間は、自分にとっても大きな自信になりました。新しい挑戦には勇気が必要ですが、環境や条件が違って、ダンスを通して共に楽しめることを実感しました。その輪がさらに広がっていく未来を願っています。



YUTO
デフダンサー

子どもたちを集めて講師をするのは、人生で初めての経験でした。きちんと教えられるか不安もありましたが、みんなの笑顔や元気いっぱいな姿に、逆に僕のほうがたくさんのパワーをもらいました。本番当日が近づくと、みんなの緊張も高まりましたが、「とにかく思いきり楽しもう！」と気持ちをひとつにして、笑顔で踊り切ることができました。会場の盛り上がりを見て、自分にとっても最高の思い出になりました。このような機会を作ってください、ありがとうございました。

ダンスチーム手話通訳メモ

- ろう者の講師の手話を、手話慣れていない子どもや制作・舞台スタッフに読み取り音声で伝えた。
- 音情報や身体の動きを伝える場面が多かったため、カウントをしたり、休みの子の配置に加わるなど、「見える」ことを重視して動いた。
- 低学年から中学生までの子どもたちへの通訳だったため、日本語に引き寄せすぎず、理解の段階を揃えることを心がけた。
- 講師自身がまだ中高生で、試行錯誤しながら取り組んでいたため、ときには相談相手になって一緒に考えることもあった。



見ることから
始まる



ワークショップではいつも、講師から「こっちを見て」「カウントを見よう」という、「見る」ことの大切さを共有する呼びかけがありました。次第に、子どもたちが元々持っている視覚的な感性も引き出され、アイコンタクトを大切に踊るダンスチームの一体感が育まれていきました。



視覚でリズムを
伝える人



ダンスチーム独自の役割として「カウントマン」がいました。指や手の動きを使って、ダンスのカウントやリズム・テンポを伝える人です。「全員が同じタイミングで動き、踊ることに集中するための支えとなる人」とMAHOさんは言います。今回はチームの手話通訳が担当しました。振りの合図を出したり、演奏のきっかけを出したり、伝わりやすいカウントの方法を、連携しながらつくっていきました。



ツールも人も
総動員



スタジオには、立ち位置を把握できるようにパビリテープを貼り、フォーメーションの確認のために数字やマグネットを使用しました。休みの子がいる時には、立ち位置がわからなくならないように臨時ダンサーが登場。制作スタッフや通訳と一緒に踊りました。役割を超えて「みんなでやろう」と臨む、ダンスチームらしい場面です。



ゆるめる時間も
大切に



長期のワークショップでは、子どもたちの気分が乗らない日もありました。スタジオの端で寝転ぶ姿も。そんなときは「見ててもいいよ、最後だけ一緒にやろう」と講師がふんわり受け止めます。このゆるさが楽しい空気を保ち、寝転がる動作はなんと、本番の振付にも採用されました。

ダンスチームのみなさん



DATA

講師 MAHO YUTO
メンバー 小学2年生から中学2年生までの6人
ダンス手話通訳 岡島珠実 平原礼奈

ダンスチーム単体ワークショップ

期間：2025年8月～10月/回数：9回
会場：大田区民ホール・アブリコ（公益財団法人大田区文化振興協会）ほか



公演のみどころ

第4楽章は激しい嵐の情景です。雷鳴の振動や土砂降りの雨など、嵐のもつエネルギーを打楽器で表現しました。伸びやかに打楽器を操る姿と、合奏を通じて生まれる響きが、子どもたち自身の「ハンドサイン」で紡がれます。

Creation

打楽器チーム講師の2人は、①楽曲に沿ってきこえるの世界で流れる音楽に打楽器を重ねていく、②きこえない・きこえにくい子どもたちが自分たちのために行う演奏表現を創る、という2つのミッションを掲げました。チームには、手話を母語とする子ども、聴力を使って音声で話す子どももいます。そこで、きこえる・きこえない、手話・音声といった違いを越えて「おんがく」を共有するために、アルゼンチンの音楽家サンティアゴ・バスケス氏が考案した「ハンドサイン」を用いた即興演奏法を導入。指揮者が手のサインで合図し、それに応じて即興的に音を重ねていくスタイルを軸に、パフォーマンスを組み立てていきました。

Workshop

ワークショップの流れ

1回目

- ・手拍子やボディパーカッション遊び
- ・講師による実演と、いろいろな打楽器にふれる体験
- ・田園のイメージを説明

2-3回目

- ・協調性を育むためのワーク
- ・リズム創作やハンドサインの練習

4-7回目

- ・稲光や雷雨のイメージ共有
- ・安全な楽器の叩き方の基礎練習
- ・コール&レスポンス練習



講師からの Message



藤井 健
パーカッショニスト/
CODA

音楽はしばしば「きこえること」を前提に語られますが、本来 music は、きこえる・きこえないに関わらず誰にもひらかれた営みです。その喜びを、舞台を通して伝えようとした試みでした。そのためには、まず打楽器チームの子どもたち自身が「おんがく」を楽しめる演奏表現を探し出すことが不可欠でした。聴者の価値観を押し付けられない表現を探り、子どもたちが主体的に喜びを見出せる形を模索しました。結果、舞台にはきこえるの違いを超えて発出・受容できる表現が散りばめられ、なにより子どもたちが楽しんでくれたことがうれしいです。聴文化とろう文化を架橋する「おんがく」の可能性をこれからも探っていきたいです。



齋藤綾乃
パーカッショニスト

きこえることを当たり前として生きてきた自分にとって、きこえない・きこえにくい子どもたちとの価値観のすり合わせは常に課題でした。半年間で学んだ最も大きな気づきは、相手への尊重を欠かさない姿勢です。そうした関係性の中で、打楽器チームの子どもたちとのセッションで「おんがく」でつながれた瞬間が何度もありました。この世界にはまだ知らない視点が広がっていると気づけたことに感謝しています。ありがとうございました。

打楽器チーム手話通訳メモ

- 聴者の講師や音声で話す子どもの言葉を、手話で話す子どもに伝えた。逆に手話を読み取るなど、多方向の通訳を行った。
- 練習時は、全員が顔を見渡ししながら演奏できるように円形の配置に席を整えるなど、場づくりにも関わった。
- サポートが必要な子どもに通訳者が一人付いて、演奏や集団行動のサポートを行った。
- ワークに参加したり、ときに子どもたちの遊び相手になったりした。



指の形で音のリズムを示したり、指先で奏者を指名したり、両手のひらの上下で強弱を伝えたり。ハンドサインは子どもたちに大人気。講師は改めて「リズムや演奏の面白さはみんなのものだ」と実感しました。



低学年中心で元気いっぱい、好奇心旺盛な打楽器チーム。稽古場では自由に動き回り、それを追いかけたり追いかけられたりする大人たち。その空気が、そのまま舞台での、のびのびとした表現につながっていきました。



「田園」の自然をどう表現しようかと悩む中で、講師が見つけたのは、休憩時間に子どもたちが、ハンドサインで合図を出し合い演奏する姿でした。当初は聴者の講師が指示を出すための手段としてハンドサインを想定していましたが、子どもたちは瞬間にそれを自分のものとしていたのです。そこで、子ども自身が情景を思い浮かべて指揮する方法へと転換し、唯一無二の表現が生まれました。



聴文化とろう文化を、打楽器でどう調和させるか探ることは、講師にとって大きな挑戦でした。CODAの音楽家である藤井さんは、二つの価値観をまたいだ文化的翻訳が求められる場面に多く直面し、悩みや試行に向き合ったと言います。きこえる・きこえない世界の間に立ち、その試行錯誤を作品へと落とし込んでいきました。

打楽器チームのみなさん



DATA

講師 藤井 健 齋藤綾乃
メンバー 小学2年生から小学6年生までの7人
打楽器手話通訳 加藤裕子 瀬戸 勇

打楽器チーム単体ワークショップ

期間：2025年8月～10月/回数：7回
会場：東京文化会館 ほか

舞響詩『田園』公演

約4ヶ月にわたり、試行錯誤と練習を重ねてきた公演当日。穏やかで神秘的、豊かで楽しく、ときに激しさも持ち合わせる普遍的な自然の美しさを、みんなの身体で奏でました。

第1楽章

自然の中へ。舞台のはじまりは、てことばチームがさまざまな自然のモチーフを表現しました。



第2楽章

小川のほとりで、鳥たちは翼をひろげて空へ飛び立ちます。



第3楽章

飛び立つ鳥を眺めながらダンスチームが登場。打楽器のビートを感じながら、村人たちの喜びを踊ります。



第4楽章

嵐がやってきた! 鳴り響く雷、吹き荒れる風。時に激しい自然や感情を打楽器チームが表現します。



第5 楽章

嵐が去り、平和が取り戻されたことを喜び感謝するシーン。大団円で全員が参加し、心が舞い、響き、詩うフィナーレへ。



雨が上がり、雲の切れ間から太陽光が差し込む様子

歌声の中で、ダンスチームが円になって喜びに満ちた心で踊る



チャフチャス



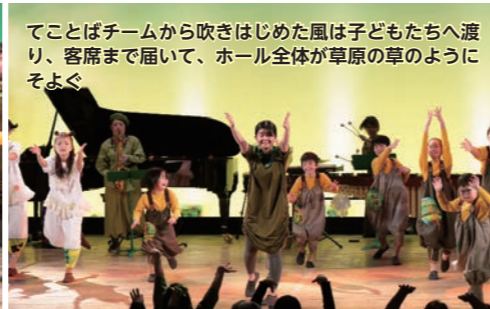
木の実などを束ねた打楽器「チャフチャス」を軽快に鳴らす打楽器チーム



観客もボディパーカッションのパフォーマンスに参加



やがて、みんなの「舞響詩」のてことばがホール内に渦巻く



てことばチームから吹きはじめた風は子どもたちへ渡り、客席まで届いて、ホール全体が草原の草のようにそよぐ



「怒りも悲しみも喜びも、すべて抱いて、芽生える“舞響詩”」
二回目の公演の最後にアドリブで詩が紡がれた



世界に光があふれるような静かなフィナーレ。会場からは手をひらひら、止まない拍手

衣装・照明

衣装・照明プランナーが、作品の世界観を表しながら、きこえない・きこえにくい人にとっても見やすい舞台作品となるよう制作しました。

衣装はチームごとのパフォーマンスに適した色やデザインに。例えば、てことばチームは、手の動き・表現がよく見えるように無地で深めの色合いにしました。照明は情景や感情の変化に応じて色や模様に変化。打楽器チームが雷の地響きを鳴らすときは、子どもたちの指揮に合わせてストロボ照明を点滅させて視覚的にも雷の迫力を伝えました。



野口さん、桜井さん、サクソフォン演奏の宮楠さん

舞台上で使った楽器

使用する楽器についても工夫しました。参加した子どもたちが触れたり演奏したりして、楽しいと感じる楽器や、お客様から見て視覚的に面白い楽器、そして音としての効果も考えながら、決定していきました。

ピアノ・マリンバ・サクソフォン・リコーダー・様々な打楽器（ティンパニ・ジャンベ・スプラッシュシンバル・チャフチャス・ウッドトム・ティクトゥク・ツリーチャイム・シェルチャイム・レインスティック・バードコール・ハーモニックパイプ 等）

アクセシビリティ・鑑賞サポート

だれもが安心して舞台鑑賞を楽しめるように、鑑賞サポートやスタッフの配置など、さまざまな工夫をしました。

- 受付と貸し出しデスク、会場内に手話通訳の配置
- ヒアリングループ席の用意（全席）
- 車いす席の用意
- 筆談ボード、UDトークの使用
- 音を振動に変換する機器「タッチ・ザ・サウンド・ピクニック」の貸し出し
- 体感振動スピーカー「Hug Me」の貸し出し
- レーザ網膜投影視覚支援機器「レティッサ オン ハンド」の貸し出し
- 聴覚保護具「イヤーマフ」の貸し出し
- 点字・拡大文字・白黒反転の曲目リストの用意
- 英語版プログラムの用意
- プログラムデータ、読み上げ対応プログラムをウェブサイトに事前公開

てことばチーム



ダンスチーム



打楽器チーム



タッチ・ザ・サウンド・ピクニック



Hug Me

参加者の声・観客の声

参加者の声

アンケートより、舞響詩「田園」ワークショップに参加してくれた子どもと保護者のみなさまからの声をまとめました。

▶ ワークショップに参加して、公演に出演して感じたこと

〈参加者から〉

- ・初めはうまくできませんでしたが、回を重ねるごとにできるようになり、毎回楽しく通うことができました。
- ・舞台では人前で緊張しましたが、とても楽しかったです。
- ・新しくできた友だちと一緒に成功できたことが嬉しかったです。
- ・また機会があれば挑戦したいです。

〈保護者から〉

- ・自分にできることを考えて行動するなど、多くの学びがあったと感じています。
- ・舞台をつくり上げるという初めての経験は、本人にとって大きな成長につながりました。自分に自信を持つ機会になったと思います。
- ・ワークショップを通して、同年代のお友達ができました。人生の宝になると思います。

▶ ワークショップに参加して起こった変化

〈参加者から〉

- ・自分らしさを出すことができたように思います。
- ・この経験を通して、表現することへの意欲が高まりました。また挑戦してみたいという気持ちも生まれました。
- ・練習量が多くて大変でしたが、最後まで頑張ってやり切ったことで、大きな達成感と自信につながりました。

〈保護者から〉

- ・最初は内気な様子でしたが、講師のみなさんのやさしい後押しで次第に心を開き、手話での表現も積極的になっていき、とても良かったです。
- ・友達と協力する力が育ったように思います。



観客の声

アンケートより、舞響詩「田園」公演を観に来てくださったお客様の声をまとめました。当日は、きこえない・きこえにくい方も、きこえる方も、たくさんのお客様にお越しいただきました。

▶ 公演を観ての感想

- ・リズムや表現にはさまざまな手段があると気づかされました。てことば、ダンス、楽器演奏、どれも感動しました。
- ・子どもたちの集中力がすごいと思いました。表情もとても良かったです。
- ・風のシーンで、観客を巻き込んで表現した場面に感動して涙が出ました。
- ・子どもたちの生き生きとした表現にエネルギーをもらいました。今回のような公演をもっと増やしてほしいです。
- ・ただ表現だけでなく、子ども自身が指揮をしたり、観客と一緒に巻き込んだりなど、いたるところで工夫があり、あっという間の1時間でした。
- ・すべての出演者が心から楽しんでいて輝いていました。
- ・「田園」という曲がこんな音楽だったのかと、とてもよく伝わりました。
- ・舞台芸術の可能性、新しい音楽の表現だと感じ、感動しました。
- ・私のようにきこえない観客で、(舞台下の) カウントを見てリズムが分かり、ステージ鑑賞をより楽しめた人もたくさんいると思います。
- ・お客さんもみんなノリノリでリズムを取っていて、ステージのみなさんと観客全員が一体化し、音楽がホール内で大きく渦巻いているように見えました。

▶ 鑑賞サポートについて

- ・音のリズム、強弱がとてもよく伝わってきました。(「タッチ・ザ・サウンド・ピクニック」使用者)
- ・太鼓をたたいている振動が伝わるところは、迫力が増してよかったです。(「タッチ・ザ・サウンド・ピクニック」使用者)
- ・振動でも音楽のテンポが伝わりました。周囲との一体感が得られました。(「Hug me」使用者)
- ・数に限りはありましたが、もっと多くの人に鑑賞サポートも活用してもらえると良いと思いました。

広報物



ワークショップ参加者募集用チラシ



公演用チラシ



当日パンフレット



手話でのワークショップ案内動画



手話での公演案内動画



パンフレット内の楽章図解ページ

舞響詩『田園』の手話通訳

ろう者のアーティスト、子どもたちと共創した「舞響詩『田園』」では、手話言語と音声言語を仲介する手話通訳者の存在が不可欠でした。6人の手話通訳者がプロジェクトを共にしました。

「よき伴走者」として



プロジェクトに参加した子どもたちの中には、手話通訳者を介して情報を得ることが初めてという子も多くいました。手話通訳の役割や見方を知ってもらい、よき伴走者となれるよう、子どもたちに伝わりやすい表現や配置を考えて進めました。

ろう通訳、協働通訳へ



てことばチームのワークショップで、講師のメアリさんがろうの子どもたちにとって自然で伝わりやすい手話で伝える「ろう通訳」を行なったのをきっかけに、合同練習でも子どもたちに向けた通訳をメアリさんが行いました。聴者の通訳者は、音声言語をメアリさんに伝えるフィーダーを担いました。ろう通訳により、子どもたちも内容をしっかり把握して進めることができました。合同練習では人数が増え、場に合ったコミュニケーションを叶えることが難しい場面もありましたが、各通訳者が持ち場を理解し、連携して動きました。

なぜこぜに



創作過程のワークショップに参加したり、カウントマンをしたり、子どもたちに寄り添い舞台上に登壇したり。なぜこぜな通訳スタイルが「田園」手話通訳チームらしさでした。

チームごとに異なる動き方で



6人はさらに2人ずつに分かれて各チームで活動しました。チームの目的や子どもたちの状況に合わせて、異なる動き方になりました（詳細はP5-10へ）。



通訳チームで「舞響詩」のてことば

石川ありす（てことばチーム担当）

多くの方々と協働できたことを、心から感謝しています。子どもたちにとってこのプロジェクトが励みとなり、自信へと繋がるよう願いながら、通訳として取り組みました。この経験は参加者全員にとって大きな糧となり、未来や希望へ続く貴重な時間だったと感じています。本番の景色は今でも鮮明に思い出され、私の励みとなっています。

瀬戸口裕子（てことばチーム担当）

年齢も環境も異なる子どもたちが一緒に作品づくりに取り組む機会は、そう多くはないと思います。講師の存在が彼らの「ロールモデル」となる、有意義で刺激的な時間になったのではないのでしょうか。通訳者同士の信頼関係も築かれ、チームの枠を超えてサポートしていただきました。ろう者や聴者といった言葉を越えて、子どもたちの素直な表現に触られたことは、何よりの幸せな経験でした。

加藤裕子（打楽器チーム担当）

長期間同じメンバーで稽古を重ね、多様な特性を持つきこえない・きこえにくい子どもたちの通訳を担えたことは、かけがえのない経験になりました。本番で見せてくれた子どもたちの表現力、感受性の豊かさに心を動かされました。どんどん吸収して成長していく姿に感動しました。体力面の厳しさも喜びに変わり、終わった今も充足感が残っています。

制作記 | 「当事者参画型公演」という言葉を越えて

—— 舞響詩『田園』制作スタッフが、プロジェクト運営において感じたことや気づいたことを綴ります。 ——

講師・通訳体制づくり

プロジェクトが動き出さず、各チームを率いる講師を検討しました。これまで東京文化会館の事業で関わりのあった方々については、得意分野やお人柄を把握できていたため、制作側から担当チームを割り振りました。一方、MAHOさんとは今回初めての協働だったため、これまでの経験や相性を踏まえ、YUTOさんをご紹介いただき、体制を整えていきました。手話通訳者はデフリンピックの開催時期と重なり、人材確保が難しい状況でしたが、早期の調整が功を奏し6名に入っていました。

最終的に、それぞれの経験や個性が見事にマッチし、豊かな創作が叶う「田園」オールスターになりました。

参加者集めが難航

参加者募集には苦労しました。きこえない・きこえにくい子どもに参加してもらおう企画だったため、ろう学校を中心にチラシを配布したものの、本当に当事者に届いているのか確信が持てませんでした。これまで接点のなかった様々なろう・難聴のコミュニティにも、思いつく限り案内を送りました。講師の手話による紹介動画も作成し、企画の趣旨が伝わるよう工夫したものの、「音楽のワークショップ」という印象が強く、飛び込みづらかった面もあるのではと感じています。過去実績も、写真や映像などの参考資料もない中で、「参加してみたい」と思ってもら導線づくりには頭を抱えるばかりでした。最終的に18名の子どもたちが集まってきて、とても嬉しかったです。

ろう者と聴者が交わる場で

一般公募の子どもたちと舞台を創る上で、長期の稽古計画や1回ごとの内容をどう設計するか、その進行スピードや密度を作り手側とすり合わせることに難しさを感じました。

そうした中で、特にろう者の講師に連絡をする際には、ろう文化に沿って簡潔で明確な文章を心がけましたが、重要な内容ほどメールが長くなってしまい、伝えたいポイントを正しく伝えられているのか不安に感じることもありました。手話動画で説明できたら良かったのでは、もっと良い方法があったかも、と今でも思います。制作のさまざまな場面でろう者と聴者それぞれの文化に触れ、多くの学びを得ることができました。

当事者参画型プロジェクトに挑戦して

既存作品ではなくオリジナルの舞台作品を、きこえない人ときこえる人が共に作る取り組みでした。子どもたちも最初は戸惑いがあったと思いますが、ワークショップを進める中で、「手話はできない」と言っていた音声中心の子が手話で仲間に話しかけるようになっていたり、ワークショップへの参加を途中でやめようかと迷っていた子が最後まで続けて「楽しかった」と伝えてくれたりしました。そして舞台では、一人ひとりの得意なことやアイデアが形になりました。子どもたちが舞台上立つ事業はこれまでもありましたが、きこえない・きこえにくい子どもが安心して参加できる場はまだ限られていると感じます。学校の枠を超えて仲間や講師、手話通訳、スタッフと出会いながら挑戦できたこの4か月は、大きな意味があったと信じています。ここでの体験や変化を糧として、今後も事業に取り組んでまいりたいと思います。

瀬戸 勇（打楽器チーム担当）

舞台制作という専門性の高い現場で多くの子どもたちと関わる機会は、大変貴重な経験でした。小学校低学年への通訳は初めてのことで、戸惑いもありましたが、回を重ねる中で年代に合う接し方や伝え方をつかんでいきました。サポートが必要な子に寄り添いつつ、他の子に特別扱いと映らないよう気にかける場面もありました。「こうすべき」という型はありつつも、柔軟な対応の必要性をあらためて感じています。

岡島珠実（ダンスチーム担当）

ろう者や子どもたちの理解を確認しながら進める流れに、場の安心感がありました。普段から、ろう者の発言の機会を適切に確保することは難しく、特に子どもの場合は権利保障についても考える必要があります。大人たちがそれを意識できていたからこそ、みんなで素敵な舞台をつくり上げられたのだと思います。通訳者同士も、気になるところはろう者を交えて納得いくまで対話しました。ろう者の在り方と社会（とくに聴者）の在り方が良く衝突したとても良い舞台でした。

平原礼奈（ダンスチーム担当）

関係性の築き方や距離感、通訳技術など、柔軟さと専門性が求められる現場でした。長期的なプロジェクトだからこそ見えてくることも多かったと感じます。企画・講師・制作のみなさんの、新しいものを生み出そうとする熱意に鼓舞され、通訳チームの自然なフォローに支えられました。カウントマンとして舞台上のみなさんと一つになれた体験は一生忘れられないと思います。

東京文化会館 事業係
榮 咲季 阪本涼音